

ベトナム中部出土の漢系遺物に関する考察： チャーキュウ遺跡の調査成果を中心に

山形 真理子*

1. はじめに

ベトナム中部にはチャンパの遺跡が数多く残されている。最もよく知られているのは「ミーソン聖域」という名称で世界遺産に登録されているクアンナム省ミーソン遺跡である。現在も約70棟ものヒンドゥー寺院建築が残り、それらは8世紀から14世紀にかけて建立されたとみられる。ただし寺院の創建はさらに古い。ミーソン寺院で最も古いサンスクリット碑文は、バードラヴァルマンというインド的な名前を持つ王がこの地でシヴァ神に捧げる寺院を建立したことを記し、その碑文の年代は専門家によって4世紀後半あるいは5世紀に比定されている。このようにミーソンがチャンパの宗教的なセンターと目される一方、政治的なセンターすなわちチャンパ王都に比定されてきたのがチャーキュウ遺跡である(図1)。ミーソンから北東に直線距離で約14kmの位置にある。地上の建築物は失われてしまったが、王都を

取り囲んだ城壁(土塁)が残っている。チャーキュウとミーソンはいずれもトゥーボン川の流域に位置している。トゥーボン川の河口から5kmほどさかのぼったところにはホイアンがある。ホイアンもまた世界遺産に登録されており、その美しい町並みが観光客を惹きつけている。

ベトナムの考古学者チャン・クオック・ヴォン教授は、チャンパは河川流域ごとに成長した複数の川筋権力からなる連合体であると考えた(Trần, Q.V. 1995; 山形・桃木 2001)。聖地(ミーソン)・王都(チャーキュウ)・港市(ホイアン)という三つの重要な地点を擁するトゥーボン水系は、チャンパを構成した地域政体の中でも重要な位置を占めた。考古学的見地からは、トゥーボン水系に初期の政体が出現する前の時代も注目される。河口近くから内陸山間部まで、鉄器時代サーフィン文化の遺跡が川沿いに集中している(図1)(Yamagata 2006)。サーフィン文化は前400年ころから後100年く

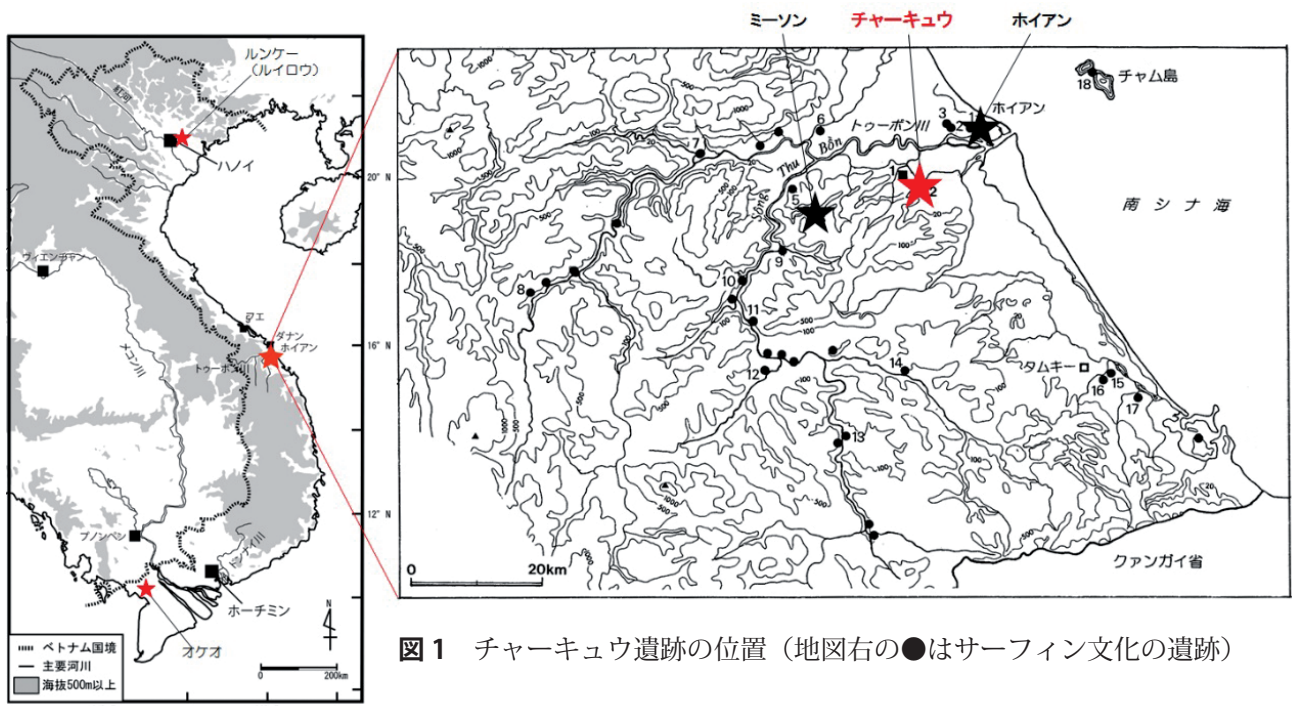


図1 チャーキュウ遺跡の位置(地図右の●はサーフィン文化の遺跡)

* 岡山理科大学経営学部経営学科

らいまで続いた鉄器時代文化であり、甕棺墓とその内部・外部から出土する副葬物を特徴とする。筆者の研究によれば、サーフィン文化衰退の直後といえる後2世紀に、チャーキュウの地に初めて人が住み始めた。彼らの物質文化はサーフィン文化の要素をほとんど残さない一方、明らかに中国の影響を示す(Yamagata 2007, 2011)。ミーソン寺院の開創に象徴的に示されるような「インド化」が始まる前の時代、後2～3世紀のトゥーボン川水系には中国の文物や観念が入り込み、それらは在地化された姿で考古遺物として残された。

中国史書の記録によれば後192年ころ、後漢の南端にあたる日南郡象林県で叛乱が起こり、その結果として「林邑」が独立した(『晋書』『水経注』)。一般に、林邑はチャンパと同一の政体と理解される。チャンパの中国名称は8世紀中ごろから「環王」、9世紀中ごろから「占城」へと変化している。林邑の王都に比定されるチャーキュウ遺跡では1920年代に行われたフランス極東学院による調査を嚆矢として、1990年から現在まで、ベトナムと外国の考古学者によって断続的に発掘調査が実施されてきた。それによって都城の出現と形成の過程が明らかになりつつある(Claeys 1931; Nguyễn, C. et al. 1991; Nguyen, K. D. et al. 2006; Yamagata ed. 2014; Lâm, T.M.D. 2017; Yamagata 2017)。

本稿ではチャーキュウ遺跡の発掘調査成果を踏まえて、チャーキュウを含むベトナム中部の遺跡から出土する漢系(中国系)遺物について論じる。そして考古学的な証拠に立脚しながら、鉄器時代から初期の地域政体が出現する時代にかけて、南下してきた中国と在地社会とのかわりについて若干の考察を行いたい。それと関連して、近年行われたチャーキュウ遺跡東城壁の発掘調査について紹介する(山形 2014; 山形他 2017; Yamagata 2017)。

2. ベトナム中部まで南下した漢系遺物

図2の年表はベトナムを大きく北部・中部・南部に分け、それぞれの地域で何世紀にどのような漢系遺物が出土しているか、現時点での知見をまとめたものである。幾つかの重要な歴史的イベントや画期を含む略年表も付している。ベトナム中部における漢系遺物について、おおまかに三つの段階に分けて以下に解説する。

2-1. サーフィン文化の漢系遺物：前1世紀～後1世紀

ベトナム中部の鉄器時代・サーフィン文化の甕棺の中から前漢鏡、銅銭(王莽銭、五銖銭)、環頭刀子(鉄器)が出土する。これらがベトナム中部まで南下した漢系遺物として最も古い種類である。鏡はトゥーボン川流域の甕棺墓から出土しており(Yamagata et al. 2001)、内陸

	歴史的イベント・画期	ベトナム北部	ベトナム中部	ベトナム南部
前三世紀 3rd century	late 3rd century - 南越による支配	Dong Sonドンソン文化 戦国式銅剣 Co Loaコーロア城	Sa Huynhサーフィン文化	
前二世紀 2nd century BC	111BC- 南越滅亡、前漢郡県設置	Co Loa 瓦、青銅鏡、漢系土器・陶器 Viet Kheヴィエトケ木棺墓、Dong Sonドンソン遺跡、Thieu Duong ティウズオン遺跡、Lang Vacランヴァク遺跡 漢系(南越系)青銅容器、前漢鏡、青銅戈、銅帶鉤、鉄長剣、半面鏡、etc.	Go Ma Voiゴーマーヴォイ遺跡、Thach Bich タックビック遺跡 Beadsビーズ	Giong Ca Voソンカーヴォ、Hang Gonハンゴン巨石墓 ビーズ
前一世紀 1st century BC		Dong Son, Thieu Duong 漢系青銅容器、前漢鏡、漢系土器・陶器、玉璧、印章、etc.	Binh Yen遺跡、Go Duaゴーズア遺跡、Hau Xa/ハウサー遺跡、An Bangアンバン遺跡、Lai Nghiライギ遺跡 前漢鏡、五銖銭、環頭刀子、ビーズ	Phu Chanhフーチャイン、Giong Ca Vo, Hang Gon 前漢鏡、ビーズ
後一世紀 1st century AD	AD 40-43 徵姉妹の蜂起 後漢馬援将軍遠征	Ngoc Lacゴックラク漢墓、初期の漢系磚室墓 印紋陶、王莽銭、漢系青銅容器、前漢鏡、etc. ↓ ドンソン文化の衰退	Binh Yen, Go Dua, Hau Xa, An Bang, Lai Nghi 前漢鏡、五銖銭、環頭刀子、ビーズ ↓ サーフィン文化の衰退	Phu Chanh, Giong Ca Vo, Giong Lonソロン Oc Eoオケオ遺跡 Phase I
後二世紀 2nd century AD	166 大秦国遣使 184 黄巾の乱 ca.184 士變交趾郡太守となる ca.192 林邑の独立(水経注、晋書)	Luy Lauレイロウ(Lung Kheルンケー)遺跡、漢系磚室墓、Tam Thoタムト案址 瓦(布目有・布目無)、漢系土器・陶器(含印紋陶)、磚、漢系青銅容器、後漢鏡、etc.	Tra Kieuチャーキュウ遺跡、Go Cam ゴーカム遺跡、Lai Nghi Indian rouletted wareインド系回転紋土器 布目瓦、封泥、漢系土器・陶器(含印紋陶)、青銅容器、石硯、青銅鏡、青銅鐙、耳当 Hoa Diemホアジエム遺跡甕棺墓 五銖銭	Oc Eo Phase I 後漢鏡、ビーズ
後三世紀 3rd century AD	220 後漢滅亡 222-280 三国呉 229 孫権による建業(南京)遷都 呉の使節、扶南訪問 265-316 西晋	Luy Lau (Lung Khe), 漢系磚室墓、Tam Tho 瓦(布目有・布目無)、漢系土器・陶器(含印紋陶)、磚、漢系青銅容器、Kend'sクンディ	Tra Kieu, Co Luyコーレイ、Thanh Hoタインホー、Thanh Chaタインチャー遺跡 人面紋瓦当、瓦(布目無)、印紋陶、クンディ チャーキュウ城壁建設	Oc Eo Phase I チャーキュウ城壁建設
後四世紀 4th century	336-349 林邑王范文の治世 380-413 林邑王范胡達の治世 317-420 東晋	Luy Lau (Lung Khe), 漢系磚室墓、Tam Tho	人面紋瓦当、瓦(布目無)、印紋陶、クンディ パードラヴァルマン王がミーソンに寺院建立	

図2 ベトナムにおける漢系遺物の出現に関する年表

(表中の赤字は漢系遺物、青字はインド系遺物(本来の起源をインドにたどることができる遺物)、緑字は林邑に関連する事項を示す。ベトナム南部のオケオ遺跡の年代観は Manguin 2004 による)

のビンイェン遺跡から日光鏡、ゴーズア遺跡から獣帯鏡、下流のホイアン近郊に位置するライギ遺跡から日光鏡を含む数個体分の破片が確認されている。いずれも製作年代が前1世紀とされる小型鏡であり、前1世紀から後1世紀にかけて漢との接触が始まったことがうかがえる。『漢書』地理志に記述されたように、この時代には中国南部とインド南部東海岸を結ぶ南海交易の航路がすでに確立しており（藤田1943; 桜井2001）、サーフィン文化を担った人々も交易に関わりながら外部世界と交渉したことであろう。甕棺墓に入れられたメノウ・カーネリアン・ガラスなどのビーズの中には、西方インドからマレー半島を経てベトナム中部にもたらされたものも含まれる（Lam, T.M.D. 2011）。

2-2. チャーキュウ遺跡ホアンチャウ地点最下層・下層とゴーカム遺跡の漢系遺物：後2世紀

後100年ころまでにサーフィン文化は終焉を迎え、甕棺墓がみられなくなる。その直後、おそらく後2世紀のいずれかの時期あるいは後1世紀末にさかのぼる時期に、チャーキュウと、チャーキュウから南東に約4kmの位置にあるゴーカム遺跡の地に、あらたに定着した人々がいた。チャーキュウ遺跡ホアンチャウ地点の最下層と下層からは中国式の本瓦葺の瓦が出土し、ゴーカムでも同種の瓦を葺いた焼失木造建築の遺構が出現した。それらがベトナム中部では最古の瓦である（山形2012）。ゴーカムで検出されたのは13m×7.5mという規模の焼失した建物であり、炭化した柱痕や並べられた床板などが確認された（Nguyễn, K. D. 2005; Nguyen, K.D. et al. 2006; Glover et al. 2011）。ベトナム中部で最古の瓦は丸瓦・平瓦ともに凹面に布目圧痕を残し、凸面は叩き板を利用した縄縵紋もしくは方角紋・刻線紋である。つまり「模骨法」を用いて製作された瓦である。平瓦には模骨すなわち桶型を形作っていた短冊状の側板、それらを縛り付けていた紐の痕跡も明瞭に残っている。瓦当の存在は確認されていない（Yamagata and Nguyen K.D. 2010; 山形2012）。

同じ種類の瓦はホイアンとダナン市の間に位置するヴォンディンクエバック遺跡でも確認されている（Lâm, T.M.D. 2017）。一方、現在までのところクアンナム省より南の各省では発見されていない。中国式本瓦葺の屋根をもつ木造建築は、まずはクアンナム省のトゥーボン川流域に出現したと考えられ、この地域の重要性が浮かび上がる。

ゴーカム遺跡では瓦のほかにも多様な漢系遺物が出土しており、印紋陶、耳當、青銅製鐺、断面三角形青銅鏃、そして最も注目すべき遺物として封泥がある（図3）

（Yamagata 2001; 山形・桃木2001）。封泥の印面は「黄神使者章」と解釈され、ゴーカムの地に道教の神を知る人がいたことを示唆する。五銖銭の圧痕を文様としてつけられた土器破片もあった。

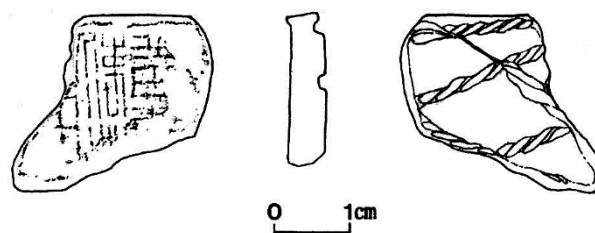


図3 ゴーカム遺跡出土封泥

おそらくこのゴーカムと時期的に平行すると思われるのが、多くの甕棺墓を出したライギ遺跡の中で37号墓から出土した漢の青銅容器群である（Reinecke 2009; Lâm, T.M.D. 2017）。三足釜、鍋、盆、碗、鏝壺が含まれる。37号墓は甕棺墓ではなく、土壙墓に青銅容器がまとまって副葬されていた。なおライギからは石黛硯と磨石（「磨」という漢字が線刻されている）がセットで出土しており、青銅帯鉤もあるので、漢人あるいは漢の地方官僚となった地元有力者の墓があった可能性がある。

これらの漢系遺物は後1世紀末から2世紀にかけて、漢人の南下に伴ってトゥーボン川流域に出現したものと考えられる。チャーキュウやゴーカムの地に建てられた瓦葺木造建築は、在地のサーフィン文化に由来するものでは決してなく、明らかに漢人もしくは漢の文化を身につけた人々がなんらかの目的のために北からこの地に渡来・移住し、建てたものである。想像であるが、彼らの目的は在地の人々を支配する、あるいはトゥーボン川の河川交通によって運ばれた物産を管理する、といったことではなかっただろうか（Yamagata 2007, 2011）。

中国史書によると後2世紀には、後漢の南境で何度か大規模な叛乱が起きていた（後藤1975）。そしてついに192年ころ、日南郡象林県の功曹の息子が率いた叛乱の結果として林邑が独立したと記録される。日南郡や象林県の位置と範囲については様々な意見があるが、トゥーボン川流域に北から南下した人々が入り込み、瓦葺木造建築を建てることによって拠点を築いたことは確かであろう。彼らの流入と定着が後1世紀から2世紀の在地社会に急激な変化を引き起こしたことは、考古学的に把握される物質文化のギャップに表されている。その変化は考古学的に、サーフィン文化の消滅と、その後にチャーキュウやゴーカムに現れた瓦葺木造建築や、多様な漢系遺物の存在に示されている。

2-3. チャーキュウ遺跡ホアンチャウ地点上層の漢系遺物：

後3世紀

チャーキュウ遺跡ホアンチャウ地点上層の遺物群は、最下層・下層から出土する遺物群とは様相を異にする。筆者は後者の遺物群にもとづいてチャーキュウI段階(Tra Kieu Phase I)、前者の遺物群にもとづいてチャーキュウII段階(Tra Kieu Phase II)という時期区分を行っている。チャーキュウではII段階になると瓦が大量に出土するようになり、それらの凹面は無紋で、布目圧痕を持たない。凸面には集合条線が引かれる。つまり、模骨法ではなく「粘土紐巻き上げ法」によって製作された瓦であり、凹面に調整痕と思われる凹凸がみられる場合もある。そして、II段階には人面紋瓦当が伴う(図4)(山形2012)。

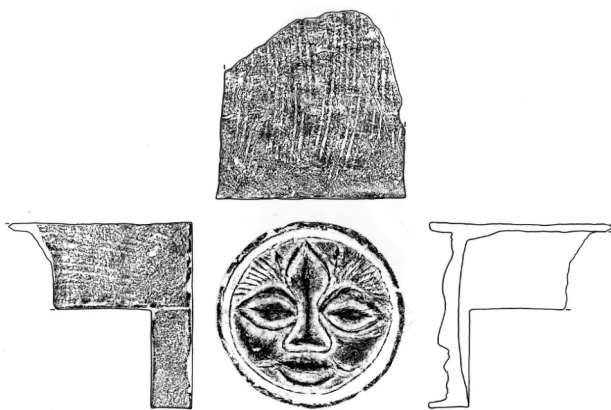


図4 チャーキュウ遺跡ホアンチャウ地点出土人面紋瓦当(瓦当直径15.0cm)

すでに指摘した通り、チャーキュウの人面紋は中国江蘇省南京市や湖北省鄂州市から出土する瓦当の人面紋と酷似する。中国の研究者によって南京から出土する六朝瓦の分析と考察が進み、それによると人面紋瓦当はおおむね三国呉において出現したものと理解される(賀2003, 2005, 2013; 王・馬2007; 王2015)。呉の瓦であるならば後3世紀の瓦とみなすことができ、チャーキュウの人面紋瓦当についても同様の年代を考えている。

チャーキュウII段階の瓦と共伴する漢系遺物として、印紋陶がある。チャーキュウI段階に属するホアンチャウ地点最下層・下層と、ゴーカム遺跡からも印紋をもつ土器が出ているが、それらと比べると器形や紋様施紋が明らかに異なる。チャーキュウI段階の印紋は雷紋が多く、しかも無紋の口縁が外反する器形をもつ。おそらく平底ではなかったであろう。一方、II段階の印紋陶は器形・紋様ともに、ベトナム北部の漢墓に副葬される印紋陶と同型式としてよい(宮本・俵2002)(図5)。ただし、チャーキュウの印紋陶のほうが新しい特徴を持つ。たとえば、最大径が胴部上半にあり、底部に向けてすぼまる

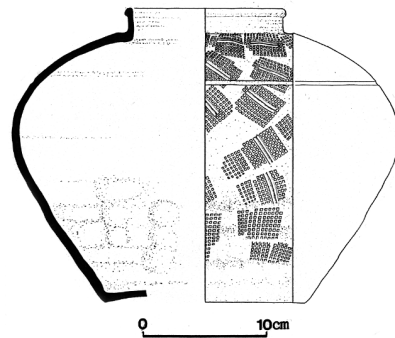


図5 チャーキュウ遺跡ブウチャウ丘東北麓出土印紋陶

器形となること、方角紋などの叩き紋様がまばらになること、などである。

一方、インド起源とされるクンディ(注口付瓶)がこの時期からチャーキュウに出現する。クンディはメコンデルタを中心に広がるオケオ文化の遺跡からしばしば出土する。オケオ文化は一般に、初期国家「扶南」の考古文化と考えられている(Malleret 1959-1963; 山本1966; 岡崎1973; Lê, X.D. et al. 1995)。チャーキュウにおけるクンディの出現は、南からの影響によるものと考えられる。

布目圧痕を持たない瓦、人面紋瓦当、印紋陶そしてクンディという遺物の組み合わせは、トゥーボン流域という範囲には限定されず、ベトナム中部の複数の地域で確認されている。すなわちクアンガイ省チャークック川流域コールイ遺跡、ビンディン省コン川流域タインチャー遺跡、フーエン省ダーラン川流域タインチャー遺跡である(山形2005; Lâm, T.M.D. 2017)。いずれも城壁を伴う都城であり、これらは3世紀に各河川の流域に成長した地域政体の中心としての役割を果たしたであろう。そして同種遺物の共有が示すように、それらは相互に結びついていた。

人面紋瓦当について言えば、都城だけではなく寺院遺跡からも発見されており、ミーソン遺跡からも出土している。現在までのところ最も南で確認されている人面紋瓦当は、カインホア省ニャチャン市にあるチャンパの寺院遺跡ポーナガールにて、フランス植民地時代に撮影された出土遺物の写真に写っているものである(Parmentier 1918, pp.241のFig.45)。

中国史書の記述によれば、2世紀末に区連が自立して王となったあと、3世紀に何代かの林邑王が立ったはずであるが名前は明らかではない。3世紀の林邑は248年に呉の交州と戦い、一方で226年から231年の間に呉に遣使し(『三国志』呉書)、268年と280年には西晋に朝貢している(『晋書』)。文献史料からは林邑が中国の複雑な形勢に対応して、軍事的侵攻と外交を行っていたことがうかがわれる。

3. チャーキュウにおける城壁の発掘調査

3-1. 城壁発掘の目的

チャーキュウ遺跡はトゥーボン川の一支流の南岸に広がっており、東西が長く南北が狭い長方形、厳密に言えばやや台形を呈するプランをもち、その範囲が城壁で囲まれている（図6）。東城壁と南城壁がよく残っており、現状で東城壁が長さ約330m、基底部の幅約33m、周囲の水田面からの比高差約2m、南城壁が長さ約1400m、基底部の幅約33m、周囲の水田面からの比高差約3mである。

筆者はこの東城壁において、2013年2月22日～3月10日、同じく8月7日～8月21日の二次にわたって発掘調査を実施した。発掘地点は東城壁の北端部である（図6）。発掘の目的は、王都を取り囲んだ城壁の建設年代と構築方法を明らかにすることであった（山形2014; 山形他2017）。

漢系遺物の問題と関連づけて前章までに述べてきたように、チャーキュウにおいて後3世紀までの遺構と遺物については具体的に論じられる資料が得られている。しかし4世紀以降の考古学的様相が明らかにされたとは言えない。ミーソンに残された碑文を含め、古いサンスクリット碑文の年代が4世紀後半から5世紀にさかのぼるならば、4世紀は林邑の「インド化」が始まる重要な時代ということになる。そのため4世紀以降の遺構と遺

物を把握することを、城壁の発掘に期待したという目的もあった。

チャーキュウ城壁に関しては、その建設に言及しているとみられる中国史料がある。『晋書』林邑伝によれば、4世紀の林邑王范文（在位336もしくは337～349年）が王位を篡奪する前、「宮室、城邑及器械」を作ること林邑王范逸に教えたという一文がある。北魏の地理書『水経注』にも同じような内容の記事があり、もともと日南郡西捲県で范椎という有力者の奴隷であった范文が313年から316年ころに南の林邑に到り、范逸に「制造城池、繕治戎甲、経始郭略」を教え、王に気に入られた（駒井1941）。

文献史料の記述が史実の一端を伝えているとするならば、林邑王范逸の時代に王都の城壁が築かれた。林邑王都が通説の通りチャーキュウ遺跡であるならば、チャーキュウの城壁は4世紀、しかもその前半に建設されたことになる。

3-2. 出土した遺構と遺物

発掘調査によって、東城壁の中心を縦走する二列のレンガ壁が検出された。このうち東側つまり城内からみて外側の壁をレンガ壁I、西側つまり内側の壁をレンガ壁IIと呼んでいる。レンガ壁I・IIともに現地表面を40～50cm掘り下げるとその上面に達した。レンガ壁上面の幅が160～170cm、二つのレンガ壁の間の幅が



図6 チャーキュウ遺跡の衛星画像（© Digital Globe, Inc. All Rights Reserved）

星印は調査地点：1. ブウチャウ丘東北麓（1990,1993 発掘）2. ブウチャウ丘東麓（1996 試掘）3. ホアンチャウ（1997-2000 発掘）4. ゴーゾーゼー（1996 試掘）5. 南城壁（1990,2003 発掘）6. 東城壁（2013 発掘）7. 仏極東学院 A, B 地点（1927-28 年発掘）

測定番号	サンプルの内容(注記番号)	Libby Age (yrBP)	1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲
IAAA-123983	A4グリッド瓦集中地点出土炭化木材(13TDTKH1A4)	1,730±20	256calAD - 299calAD (36.5%) 318calAD - 349calAD (25.6%) 369calAD - 378calAD (6.1%)	250calAD - 385calAD (95.4%)
IAAA-130343	A4グリッド瓦集中地点出土炭化木材(13TDTKH1A4)	1,690±20	342calAD - 392calAD (68.2%)	260calAD - 280calAD (7.2%) 325calAD - 412calAD (88.2%)
IAAA-132077	A8グリッドサブトレンチ出土炭化物(13TDTK(2)H1A8)	1,950±20	26calAD - 75calAD (68.2%)	3calAD - 87calAD (91.9%) 105calAD - 120calAD (3.5%)
IAAA-132078	A10グリッド瓦・礫集中地点出土炭化物(13TDTK(2)H1A10)	1,760±20	248calAD - 260calAD (14.4%) 280calAD - 326calAD (53.8%)	230calAD - 346calAD (95.4%)
IAAA-132079	A13グリッド出土焼成粘土塊(壁体破片)付着炭化物(13TDTK(2)TS5A13L8)	1,620±20	400calAD - 430calAD (42.4%) 493calAD - 511calAD (16.4%) 518calAD - 529calAD (9.4%)	391calAD - 475calAD (58.7%) 485calAD - 535calAD (36.7%)
IAAA-143172	F7グリッド瓦・土器破片集中地点出土炭化物(13TDTK(2)TS2F7)	1,760±20	243calAD - 260calAD (18.5%) 280calAD - 325calAD (49.7%)	217calAD - 351calAD (94.5%) 369calAD - 378calAD (0.9%)

OxCal v4.2.4 Bronk Ramsey (2013); r5 IntCal13 atmospheric curve (Reimer et al 2013)

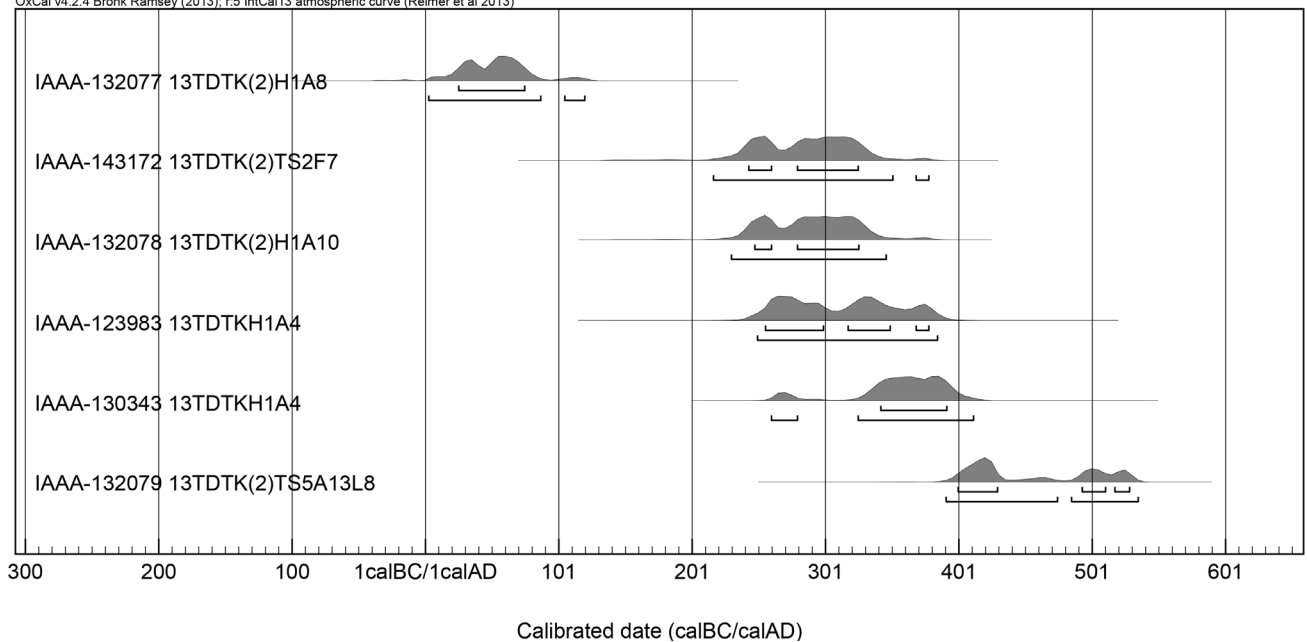


図7 チャーキュウ遺跡東城壁の放射性炭素年代とそのマルチプロット図 (株加速器分析研究所測定)

200～210cm、レンガ壁の間は粘土を積み上げた盛土層である。レンガ壁Ⅰ・Ⅱと中央の盛土層を一体のものとすると全体の幅が約550cmとなる。これは現存する城壁の「芯」と言うべき構造であり、おそらく最初に構築された城壁の遺構であるが、レンガ壁の外表面が当時どの程度露出していたのか判断しかねている。レンガ壁の高さは残りのよい箇所では195cmを測り、そこではレンガが19段積まれているのが観察された。城壁の上面と基底面はともに北に向かって徐々に下がっている。その先には小川が東流しており、この小川が城内と城外を結ぶ通路の役割を果たしたかもしれない。レンガ壁の上面にはレンガが切り取られて小石が集中する遺構が数ヶ所あり、柱礎の痕跡とみられる。レンガ壁の上に建造物が存在した可能性が高い。

上述の「芯」構造の両側に堆積する層序の多くは、城壁の裾に向かって緩やかに傾斜していた。大小のレンガ破片が集中する層、大量の瓦破片と石が混じる層などもあり、人為的に造成されたものである。この造成は最初に築かれた城壁を増築（補強あるいは拡張）する目的で行われたと考えられる。

出土遺物はレンガ、瓦、建築装飾、土器、壁体に由来すると思われる焼成粘土塊などである。このうちレンガはレンガ壁Ⅰ・Ⅱに積まれていたものと、壁の両側に堆積する層から出土するものに分けられる。原形を保つレンガは多くはないが、典型的なサイズを挙げるとすれば37×18×9cmである。瓦は破片総数9123点が出土し、総重量は305.2kgであった。そのほとんどは城壁建設あるいは増築に伴って故意に盛土に混ぜられたものと解釈される。瓦の種類はホアンチャウ地点上層から出土する瓦と同じであり、中国式本瓦葺の屋根に葺かれていた軒丸瓦・丸瓦・平瓦である。瓦当紋様は人面紋のみが確認されている。城内で出土した瓦と比べると玉縁の作り方が簡略化されている点など、城壁出土瓦のほうが新しい特徴を示すことが注目される。土器の種類も城内とほぼ同じであり、漢系印紋陶とクンディも出土している。印紋陶の中には器壁が非常に薄いものがあり、これも新しい特徴と見なされる。

3-3. 城壁の構築とその年代

城内出土遺物との比較によれば、瓦と印紋陶には比較的新しい特徴があると認められたものの、詳しい分析には至っていない。そこで、東城壁のサンプルから得られた放射性炭素年代6件の較正年代を考え合わせると（図7）、城壁の建設は後3世紀後半から4世紀にかけての時間幅の中で始められたと考えるのが妥当である。

上記の年代のなかで、後1世紀を中心とする古い年

代を出したサンプル（IAAA-132077）は、二列のレンガ壁の間のサブトレンチから採取された炭化物であり、盛り土に入り込んだものであるため城壁の構築年代とは関わりないと解釈している。さらに、後4世紀末から6世紀前半という年代を出したサンプル（IAAA-1320079）は城壁裾部に近いグリッドから出土した焼成粘土塊に付着していた竹由来と思われる炭化物であり、城壁の増築（補強あるいは拡張工事）の年代を示すものと解釈できる。

構築方法に関して、中国式の版築が行われていないことは明らかである。2つのレンガ壁とその間の盛土層は最初に建設された城壁の遺構である。城壁裾部で出土した焼成粘土塊に付着していた炭化物が4世紀末から6世紀前半という年代を示したことに示唆されるように、4世紀末以降に城壁の増築（補強あるいは拡張工事）が行われた可能性が高い。発掘区のセクションの解釈は難しいが、少なくとも一度の増築工事が実施されたと考えている。

4. ベトナム北部との関係

本稿はベトナム中部に焦点をしばっているが、中国との関係についていえば北部の遺跡と遺物が重要であることは言うまでもない。

ベトナム中部のサーフィン文化と並行する時代、ベトナム北部では銅鼓を中心とする青銅器群を特徴とするドンソン文化が栄えていた。ドンソン文化の遺跡からは、標式遺跡であるタインホア省ドンソン遺跡から出土した戦国式銅剣（桃氏剣）のように、前3世紀にさかのぼる中国系の遺物が認められている。ただし、副葬された墓の年代よりも遺物の年代が古い可能性がある（俵2014）。前203年に現在の広州で自立した趙佗が建てた南越国は、前2世紀にはすでにベトナム北部に影響を及ぼしていたことが明らかにされている（吉開1998, 1999, 2000）。南越によって攻められて落城したとされるハノイ北郊のコーロア城は、三重の土塁と濠に囲まれた大規模な城郭である。この遺跡からはベトナムで最も古い瓦と漢系の陶器が出土し、青銅鋸を铸造した遺構も検出されている（ファン2010）。筆者はコーロアの瓦を広州の南越宮署遺跡の瓦と比較し、コーロアでは南越の瓦を模して前2世紀から瓦の製作が開始されたと考えている（山形2012）。前111年、南越が前漢の遠征軍に敗れて滅亡し、旧南越の地は漢の郡県支配に取り込まれた。ベトナム北部の紅河流域には交趾郡、ドンソン遺跡が含まれるタインホア省地域には九真郡、さらに南に日南郡が設置された。日南郡の南端がどこまで伸びていた

か意見が分かれているが、いずれにせよベトナム中部に広がっていたサーフィン文化の担い手たちが日南郡と直接隣り合うことになった（あるいは、一部は漢の支配に取り込まれた）可能性がある。

サーフィン文化とドンソン文化が接触を持ったことは明らかであるが、物質文化としてはお互いかなり異質であった。しかし両文化はともに、後100年ころまでには衰退したとみられる。在地文化の衰退には、ベトナム北部を席卷した趙姉妹の叛乱（起義）と、後漢の將軍馬援による鎮圧という事件が影響したであろう。交趾郡や九真郡では後1世紀後半には磚室墓が築かれるようになり、土器、陶器、陶製明器、青銅器（銅鏡、容器、印章、銅銭など）が副葬された（Janse1947,1951; 宮本・俵 2002; 俵 2014）。チャーキュウ遺跡などから出土する印紋陶については、タインホア省で調査されている漢墓から出土する陶器との比較研究が必要となる。

3世紀について、チャーキュウの人面紋瓦当を呉の瓦当紋様と結びつけて考えているが、人面紋瓦当はベトナム北部からも出土している。交趾郡の郡治と目されるバックニン省ルイロウ遺跡（ルンケー遺跡）と（Trình C. T. et al. 1986; 西村 2011）、九真郡の窯であったタインホア省タムト窯址（Janse1947,1951）である。とくにルイロウ城の人面紋瓦当については2世紀後半にさかのぼるという説があり（西村 2011; Dǎng H.S. et al. 2016）、よって人面紋瓦当の最古例はルイロウにあり、北部ベトナムから南京やチャーキュウへ伝播したという方向性が想定されている。ルンケーでは近年、日本の東亜大学とベトナム歴史博物館、さらにはベトナム国家大学による発掘調査が進行しており（黄 2014; Dǎng H.S. et al. 2016）、人面紋瓦当の出土層位や共伴関係などの考古学情報に裏打ちされた議論が深まることが期待される。

5. まとめ

ベトナム中部における漢系遺物は、サーフィン文化の甕棺墓に副葬された前漢鏡や環頭刀子、銅銭を始まりとする。これらは在地社会が漢の南下にともなって漢文化と接触したことによって入手したか、あるいは南海交易を通してもたらされたものと理解される。後2世紀もしくはさらに古く1世紀末には、トゥーボン川流域に中国式の瓦を葺いた木造建築が出現した。その建築に伴って、印紋陶や封泥を含む多様な漢系遺物が遺跡に残されたのである。瓦葺建物の出現は北から渡来あるいは移住した人々の存在を意味し、それは在地社会を大きく変容させる要因となったであろう。中国史書が伝える林邑の独立を経て、3世紀以降、呉と同じモチーフを採用した

人面紋瓦当が林邑の複数の都城で建物の屋根を飾った。それらは宮殿や寺院などの特別な建物であった。ベトナム中部の複数の川筋に地域的な権力が成長し、それらのセンターが互いに結びつく形で林邑を構成したと考えられる。なお、チャーキュウ遺跡出土瓦と土器の胎土分析によると、それらが遺跡近辺の粘土を利用して生産された可能性が高い（Beveridge 2014; 山形他 2017）。さらに、チャーキュウ、タインホー、タインチャーの出土瓦については、製作手法や紋様の面から、各遺跡それぞれの独自性が看取される。漢系遺物が早くから土着化していた点は重要であると考えられ、今後はその土着化の過程と実態の解明に取り組む必要がある。

謝辞

本稿をまとめるにあたり、以下の皆様からご協力とご教示を賜った。ここに記して感謝申し上げます（順不同、敬称略）。

Ian C. Glover, Nguyễn Kim Dung, Bùi Chí Hoàng, Lâm Thị Mỹ Dung, Trần Kỳ Phương, Nguyễn Khánh Trung Kiên, Đặng Ngọc Kính, Nguyễn Hoàng Bách Linh, Nguyễn Thị Tuyết, Nguyễn Hữu Mạnh, 深見純生, 俵寛司, 徳澤啓一

付記

本研究は科学研究費補助金基盤研究（B）（課題番号 23401031, 17H02413）ならびに平成 24 年度三菱財団人文科学研究助成による成果の一部である。

本稿では、引用参考文献を除き、ベトナム語独特の符号を省略している。

図の出典

図1～図5 筆者作図、図6 衛星画像（© Digital Globe, Inc. All Rights Reserved）を筆者改変、図7 表は筆者作成、マルチプロット図は(株)加速器分析研究所作成

引用参考文献

（日本語）

岡崎敬 1973 「南海を通ずる初期の東西交渉—タイマイを通じて見た古代南海交易—」『東西交渉の考古学』平凡社：354-384.

黄曉芬（編）2014 『交趾郡治・ルイロウ遺跡 I』科学研究費補助金研究成果報告書

後藤均平 1975 『ベトナム救国抗争史』新人物往来社

駒井義明 1941 『南部アジア上代史論』彙文堂書店

桜井由躬雄 2001 「南海交易ネットワークの成立」山本達郎・桜井由躬雄編『岩波講座東南アジア史 1 原史東南アジア世界』:113-146.

俵寛司 2014 『脱植民地主義のベトナム考古学 「ベトナムモデル」 「中国モデル」を超えて』風響社

藤田豊八 1943 「前漢に於ける西南海上交通の記録」『東西交渉史の研究』荻原星文館：95-135.

西村昌也 2011 『ベトナムの考古・古代学』同成社

- ファン・ミン・フエン著、西野範子・西村昌也編訳 2010 「ハノイ郊外コーロア城における鋳造炉遺構」今村啓爾編『南海を巡る考古学』同成社：53-75.
- 宮本一夫・俵寛司 2002 「ベトナム漢墓ヤンセ資料の再検討」『国立歴史民俗博物館研究報告』97:123-92.
- 山形真理子 2005 「林邑の都城」『東南アジアの都市と都城』東南アジア考古学会研究報告第3号：33-52.
- 山形真理子 2012 「南境の漢・六朝系瓦ーベトナム北部・中部における瓦の出現と展開ー」『古代』第129・130合併号：241-270.
- 山形真理子 2014 「ベトナム中部・チャーキュウ遺跡の城壁に関する基礎的所見」『新田栄治先生退職記念東南アジア考古学論集』：57 - 66.
- 山形真理子・桃木至朗 2001 「林邑と環王」山本達郎・桜井由躬雄編『岩波講座東南アジア史1 原史東南アジア世界』：227-254.
- 山形真理子、Nguyễn Khánh Trung Kiên、鐘ヶ江賢二、深山絵実梨、鈴木朋美、俵寛司 2017 「ベトナム中部・チャーキュウ遺跡の発掘調査成果ー林邑都城における城壁の構築方法と年代に関する考察ー」日本考古学協会第83回総会研究発表、2017年5月28日、於大正大学
- 山本達郎 1966 「古代の南海交通と扶南の文化」『古代史講座』第13巻、学生社：124-144.
- 吉開将人 1998, 1999, 2000 「印からみた南越世界ー嶺南古璽印考ー（前・中・後篇）」『東洋文化研究所紀要』136（前篇）：89-135, 137（中篇）：1-45, 139（後篇）：1-38.
（中国語）
- 賀雲翱 2003 「南京出土的六朝人面紋與獸面紋瓦当」『文物』2003(7)：37-44.
- 賀雲翱 2005 『六朝瓦当與六朝都城』文物出版社、北京
- 賀雲翱 2013 『六朝文化：考古與發現』三聯書店、北京
- 王志高・馬濤 2007 「論南京大行宮出土的孫吳雲紋瓦当和人面紋瓦当」『文物』2007(1)：78-93.
- 王志高 2015 『六朝健康城發掘與研究』江蘇人民出版社、南京
（ベトナム語、英語、仏語）
- Beveridge (Prior), Ruth. 2014 The analysis and identification of the ceramic fabric groups of Tra Kieu. In Yamagata, M. (ed) 2014 *The Ancient Citadel of Tra Kieu in Central Vietnam: The Site and the Pottery*. Kanazawa Cultural Resource Studies 14. Center for Cultural Resource Studies, Kanazawa University: 111-141.
- Claeys, Jean-Yves. 1931. Simhapura. *Revue des Arts Asiatiques* 2(7): 93-104.
- Đặng Hồng Sơn, Nguyễn Văn Anh, Nguyễn Minh Hùng 2016 Đầu Ngói ống mặt người Luy Lâu (Việt Nam) (Human face-shaped tile ends at Luy Lau site, Vietnam). *Khảo Cổ Học (Archaeology)* 2016(6): 49-70.
- Glover, Ian, C. and Nguyễn Kim Dung. 2011. Excavations at Gò Cẩm, Quảng Nam, 2000-3: Linyi and the emergence of the Cham Kingdoms. In Trần Kỳ Phương and Lockhart, B.M. (eds) *The Cham of Vietnam: History, Society and Art*, 54-80. Singapore: National University of Singapore Press.
- Janse, O.R.T. 1947, 1951 *Archaeological Research in Indo-China*, vols. I & II. Harvard University Press, Cambridge.
- Nguyen Kim Dung, Glover, I.C. and Yamagata, M. 2006 Excavations at Tra Kieu and Go Cam, Quang Nam Province, Central Viet Nam. Bacus, E., Glover, I. and Piggott, V. (eds) *Uncovering Southeast Asia's Past*. National University of Singapore Press, Singapore: 216-231.
- Lam Thi My Dzung 2011 Central Vietnam during the Period from 500 BCE to CE 500. In Manguin, P.-Y., Mani, A. and Wade, G. (eds.) *Early Interactions between South and Southeast Asia*. Institute of Southeast Asian Studies, Singapore, and Manohar, India: 3-15.
- Lâm Thị Mỹ Dung 2017 *Sa Huỳnh – Lâm Ấp – Champa, thế kỷ trước Công nguyên đến thế kỷ sau Công nguyên* (Sa Huynh – Linyi – Champa, The 5th century BC to AD the 5th century). Nhà Xuất Bản Thế Giới, Hà Nội.
- Lê Xuân Diễm, Đào Linh Côn, Võ Sĩ Khải 1995 *Văn Hóa Óc Eo – những khám phá mới* (Oc Eo Culture – Recent Discoveries). Nhà Xuất Bản Khoa Học Xã Hội, Hà Nội
- Malleret, Louis. 1959-1963. *L'archéologie du Delta du Mékong*. (7 vols.) Paris: École Française d'Extrême-Orient.
- Manguin, Pierre-Yves 2004 The archaeology of early maritime polities of Southeast Asia. In Glover, I.C. and Bellwood, P. (eds.) *Southeast Asia: from prehistory to history*. Routledge Curzon, London and New York: 282-213.
- Nguyễn Chiêu, Lâm Mỹ Dung, Vũ Thị Ninh 1991 Đồ gốm trong cuộc khai quật di chỉ Cham cổ ở Trà Kiệu năm 1990 (Ceramics in the excavation of ancient Cham site in Tra Kieu in 1990). *Khảo Cổ Học (Archaeology)* 1990(4): 19-29.
- Nguyễn, Kim Dung 2005. Di chỉ Gò Cẩm và con đường tiếp biến văn hoá sau Sa Huỳnh khu vực Trà Kiệu [Go Cam site and post-Sa Huynh acculturation at Tra Kieu area]. *Khảo Cổ Học [Archaeology]* 2005(6): 17-50.
- Parmentier, H. 1918 *Inventaire descriptif des monuments cams de l'Annam*, Tomes II. Ernest Leroux, Paris.
- Reinecke, A. 2009 Early Cultures (first millennium B.C. to second century A.D.) In Tingley, N. (ed.) *Arts of Ancient Viet Nam, From River Plain to Open Sea*, Asia Society and The Museum of Fine Arts, Houston. Yale University Press, New Haven and London: 23-53.
- Trình Cao Tường, Tống Trung Tín, Lê Đình Phụng 1989 Luy Lâu – mua khai quật năm 1986 (Luy Lau - Results of excavation made in 1986). *Khảo Cổ Học (Archaeology)* 1989(4): 74-86.
- Trần Quốc Vượng 1995 Miền Trung Việt Nam và văn hóa Champa (Central Vietnam and Champa culture). *Nghiên Cứu Đông Nam Á (Southeast Asian Studies)* 1995(4): 8-24.
- Yamagata, M. 2001 Phong nề của di tích Gò Cẩm (Fengni of the Go Cam site). *Những phát hiện mới về khảo cổ học năm 2000* (New discoveries of archaeology in 2000): 414-416.
- Yamagata, M. 2006 Inland Sa Huynh Culture along the Thu Bon River Valley in central Vietnam. In Bacus, E.A., Glover, I.C. and Piggott, V.C. (eds) *Uncovering Southeast Asia's Past*, National University of Singapore Press, Singapore: 168-183.
- Yamagata, M. 2007 The early history of Lin-i viewed from archeology. *ACTA ASIATICA* 92: 1-30.
- Yamagata, M. 2011 Trà Kiệu during the second and third centuries CE: the formation of Linyi from archaeological perspective. In Trần Kỳ Phương and B. M. Lockhart (eds.) *The Cham of Vietnam: History, Society and Art*. National University of Singapore Press, Singapore: 81-101.
- Yamagata, M. (ed) 2014 *The Ancient Citadel of Tra Kieu in Central Vietnam: The Site and the Pottery*. Kanazawa Cultural Resource Studies 14. Center for Cultural Resource Studies, Kanazawa University.

- Yamagata, M. 2017 Construction of Linyi Citadels: The Rise of Early Polity in Vietnam. In Karashima Noboru and Hirose Masashi (eds.) *State Formation and Social Integration in Pre-modern South and Southeast Asia: A Comparative Study of Asian Society*. Toyo Bunko Research Library 16. The Toyo Bunko, Tokyo: 27-54.
- Yamagata, M., Pham Duc Manh and Bui Chi Hoang 2001 Western Han Bronze Mirrors recently found in Central and Southern Vietnam. *Bulletin of the Indo-Pacific Prehistory Association* 21: 99-106.
- Yamagata, M. and Nguyen Kim Dung 2010 Ancient roof tiles found in Central Vietnam In Bellina, B., E. A. Bacus, T. O. Pryce, and J. Wisseman Christie (eds.) *50 Years of Archaeology in Southeast Asia: Essays in Honour of Ian Glover*. River Books, Bangkok: 194-205.